第２節　21世紀の女性教師像

１）これからの女性教師の役割

今回のアンケート調査により、多くの女性教師は日蓮聖人の教えを人々に伝え広め、幸せで平和な社会を築いていきたいという篤い想いを持ち、日々努力している様子が伺えます。しかしその篤い思いをどのように実現していけば良いのか方法がわからず、色々と模索しているのが現状だと思います。女性教師が剃髪・有髪に拘らず、法華経の精神を理想として共に手を携えながらその実現に努力して行くことが大切です。

今回のアンケートを集約すると次のような事が見えてきます。
１、せっかく信行道場を出ても、何も活動していない人がいること
２、何か活動したくても手だてがわからないこと
３、男性教師と同じ土俵に立って活動することに自信が持てないこと
４、寺院社会では未だに女性は一段低く扱われること
５、仲間を作るために女性教師の組織を作りたいこと
以上の点を、項目ごとに検証してみたいと思います。

1、せっかく信行道場を出ても、何も活動していない人がいること

在家出身者の方が教師になっても活動の場が無いことが多く、師僧の支援がそこまで行き届いていない事も考えられます。「宗教活動していない」と回答された方のうち、「活動したいが機会がない」、「機会が有れば活動したい」という意志をお持ちの方には、平成14年度より宗務院に開設されました総合相談所やミトラサンガの相談窓口をもっと活用して頂きたいと思います。しかし、その方達には宗報が届いておらず、総合相談所やミトラサンガの存在を知らない可能性があります。師僧や身近な教師達の手助けが望まれます。

2、何か活動したくても手だてが解らないこと

「布教活動をしたい」、「社会貢献したい」という意欲はあるが、どのように実現していけばよいのかわからないと言う声が多く、理想と現実の狭間で戸惑っている様子が伺えます。これは５、にもつながりますが、仲間を作り、何が出来るのか、考え取り組んでみる方法もあると思います。しかし現状では全国的な組織を作ることは難しい点があるので、地域ごとに集まり活動してみる、また感性で結ばれた仲間同士で何かをすると言うことなら可能性はあるのではないでしょうか。女性の視点を考慮しての女性の心の拠り所としての教義の検討（女人成仏、薬王菩薩の浄土など）、心理、介護、布教法、料理など、それぞれの興味のある分野で、交流の出来る方々で活動するなど検討してみたいと思います。

現在、信行道場入場時の立場のからわかるように、教師の妻と寺族を合わせると約５割です。教師を兼ねる寺庭婦人達は、寺院に於いては男性教師の補佐、住職と檀信徒の間を繋ぐパイプ役、また法器養成の一端を担っています。彼女達に実生活で得た子育てや親の介護、主婦としての経験を通して、もっと檀信徒の方々や一般の方々に、家庭に於ける宗教の役割の大切さを、伝え広めていって欲しいと思います。

また、育児に悩む若い母親、母性が欠如している母親達が多くなっている現在、法華経の教

えを通して幼児期の家庭教育が、いかに大切であるかを、母親の役割がいかに大きいかを、伝えていくことは大事なことです。アンケートのなかにも、「これからの日本を背負って立つ子供達を育てる母親に、宗教の必要性を話したい」、「子育てで悩む若いお母さん、介護の必要な父母を持って悩む人の話し相手をしたい」、「女性として、嫁として、母親として経験したことは布教に役立つと思う」などの声が寄せられました。同じ思いを持つ者同士が集まり、現代の社会に失われつつある心の教育を実現していきたいと思います。

実際に、教区単位・宗務所単位で女性教師の会が運営されているところもあります。例えば、北海道西部には尼僧会があり、14名が会員になっています。剃髪・有髪の教師が、一緒に月一回の研修会を開いています。身近なところから女性教師の会を作り、活動することも検討してみたいと思います。

3、男性教師と同じ土俵に立って活動することに自信がもてないこと

これは、経験不足から来るところが多いと推察されます。地域ごと、また全国的な研修会を設け、個人の能力の向上の機会を増やすことだと思います。男性と一緒の研修は、体力的・年齢的・日数的に辛いこともあるので、もっと気軽に参加できるような研修会を企画することも必要でしょう。

アンケートの集計によると、補教道場出身の住職の方も大勢いることや、きちんとした法要を営みたいという意欲がうかがえ、生活収入を寺院以外に頼りながらも活動している女性住職も大勢いることがわかります。しかしながら、非住職の女性教師には、信行道場は「声明中心で役に立たない」という声もあり、学んだ法要儀式を活用する機会に恵まれない女性教師の意欲を削ぐ状況があることを前提に、現実に活用出来るカリキュラムが望まれます。

以上のような現状から、技術的なものも大事ですが、まず女性教師自身が「宗教活動そのものが社会貢献である」と言う信念を持ち、堂々と葬儀・法要を営むことの出来るようになることが肝要だと思われます。今後、少子高齢化社会への変化にともない、「家族葬」が社会のニーズになりつつあることも踏まえ、女性教師ならではのきめ細やかな対応が望まれる状況が考えられます。女性教師が教師を志すきっかけは、ご親族などのご逝去（祖父母、父母、夫、子、恩師など）である場合が、アンケートの中にも少なからずありました。そのような困難な体験を乗り越えて社会貢献を志す女性教師は、同じ悲しみを体験した人に共感を持ち、温かく支えていく大きな力となることでしょう。例えば、死後７日目ごとの読経は、「癒し」という視点からも意味あることですし、仏壇などを通して死者との魂の交流のある日本の場合、米国の場合と比較して、心の安定度が高いと言う研究もあるそうです。（『対象喪失』小此木啓吾　中公新書参照）

また、女性教師は、最後の研修が信行道場という方が大勢います。

道場のカリキュラムに必要なのは、単なる形式美の指導に終わることなく、堂々と、信念と生き甲斐をもって宗教者として出発できるように、後押しすることではないでしょうか。たとえ、35日という限られた日数であるにしても、せめて日蓮聖人の示される女人成仏の法門の意義をしっかり学び、人生の悲哀に向き合う仕事にじっくりと丁寧に付き合う宗教者の存在意義がいかに大きいかを信行道場でご指導頂ければ、還俗ということなく、生涯を終えるまで、現役の女性教師としての生き甲斐と尊厳を保ち続けることができるのではないでしょうか。

もちろん、宗教活動が悲哀の仕事だけに限るのではないことは、言うまでもありません。出家の動機も人生経験も様々な背景を持つ女性教師が、今後ますます多様化する社会において、

活動の幅を広げる意味でも、多様な在り方にならざるを得ないと思われます。

4、寺院社会では未だに女性は一段低く扱われること

長い歴史の中で女性に対する不平等を内包していた仏教教団は、いま女性の人権に関して、それぞれの課題を背負っていると言えます。日蓮宗では、法制上は早くから男女平等になっていますが、今回のアンケートでもわかるように、全体として女性教師はまだまだ低く弱い立場に置かれています。このような現状を解決するためには、「女人成仏」の教義の再検討をし、女性仏教徒の活力の源となる日蓮聖人の女人成仏の教えを正しく理解することではないでしょうか。また男女同権、平等、共同参画に関する宗門全体の意識向上をお願いします。立教開宗750年慶讃特別布教のテーマとしての「誓願」の言葉が、言葉だけに終わらない事を切に願います。

石橋湛山先生は、「一口に我が社会は －その当の婦人までも加わって－『女が』と軽蔑する。実際現在の我が婦人には、軽蔑されても致し方ない要素は沢山にある。けれどもそれらは多くは修養の足らざるためであって、その修養を婦人に与うるには、彼らを社会に出して活動させるほかに、方法はない。今日の男子が、もし平均して女子に勝った修養を有すとせば、そは学校教育のためでも、あるいは天賦でもなくして、早くから社会に活動し、いわゆる世の荒波にもまれた結果である。」と述べられています。(『石橋湛山評論集』岩波文庫）このように考えますと、女性教師が男性教師と平等、共同参画を実現するためには、その機会と経験が不可欠です。宗門の機構の中に女性を一割から二割配置し、経験を積ませる機会の配慮が必要なのではないでしょうか。一般社会では、「組織の中に三割の女性を入れると変わる」と言われています。宗門の要職にも少しずつ女性が増えていくことを望みます。

「日本の男女格差は、職場環境、家庭、社会の問題が複合的に絡み合っているだけに、職場の意識が変われば多くの分野へも変化が波及する可能性が高い」と言われています（学習院大学教授　脇坂明氏　平成15. 4. 22付　読売新聞夕刊)。「立正安国」を目指す宗門が、率先して実践、行動することを期待します。

5、仲間を作るために女性教師の組織を作りたいこと

前述したように、全国組織を作ることはまだ時期早尚な気がします。まずは少人数から始め、徐々に全国的組織にしていくことが考えられます。また昭和26年に尼僧法団が結成され、現在も活躍されています。組織作りには、尼僧法団の方々と連携を取りながら進めていきたいと思います。社会の少子化傾向につれて、女性後継者が少しずつ増加傾向にあります。しかし、今は、全教師中約２割に過ぎませんので、まだ少人数の地域もあります。男性優位の社会での孤立化が伺われ、交流や情報交換の場を持つには、難しい現況があることもご理解ください。今後は寺庭婦人・寺族の女性も含めての交流も考えられるでしょう。

近年、寺庭婦人から教師を目指される方も増え、多くは有髪で活躍されていますし、若い方は剃髪で信行道場に入場しても、修了後は有髪で活動している方が多いようです。尼僧法団は剃髪であることが入団資格ですので、入団し共に研修に励むことが出来ませんでした。しかし尼僧法団の方にお話を伺ったところ、「最近有髪の女性教師が増えているので活動への参加を呼びかけていますがなかなか参加して頂けない」ということでした。女性教師が少数であることを考えると、剃髪・有髪に拘らず協力し合い、資質の向上に努めることが大切になるでしょう。剃髪には剃髪の良さがあり、有髪には有髪の良さがあり、共にお互いを理解し合い、平和

で信頼しあえる社会を築く誓願を込めて、お題目の灯りをかかげ、一隅を照らしていきたいと切に望みます。一朝一夕では築くことの出来ない「信」の仏国土を現世に実現させていくことが、私たちの立正安国を目指す行なのではないでしょうか。

以上５項目に分け、将来の展望を考えてみました。私たちは、日蓮宗の女性教師としての誇りと自信を持ち、「自行化他」にわたる宗教活動をしていきたいと願っています。そのためには、個々のたゆまない努力は言うまでもなく、また宗門も、活動を温かい目でご支援下さるようお願いします。

２）「女人成仏」の教義の再確認

男女共同参画の視点で言えば、せっかくの「女人成仏」の教義が、今ひとつ現場に反映されていない感じがします。歴史上、日本社会に於ける女性蔑視に、仏教の「五障三従」や「女人不成仏説」が大きな影響を与えたことは揺るぎない事実です。また「妙法蓮華経提婆達多品第十二」の解釈をめぐっても、仏教界では今もって混乱がありますし、男女共同参画社会を推進していく上でのネックになっています。

しかしながら石川教張先生、西口順子先生が言われているように、日蓮聖人は「変成男子」を否定し、女性のままでの成仏であると説かれていました。特に石川先生は、「大崎学報」の中で、「日蓮ほど女人成仏を重視し、女人成仏の道を唱導した人はいないと言ってよい。仏教がすべて、この女人成仏を説いているのかと言うと決してそうではない。しかし法華経は提婆品において龍女の成仏を説きあかしている。この提婆品の龍女成仏は、小乗経や諸大乗経の女人五障・不浄説を取り上げながら、それらの諸説を打ち返して、女は仏になれないという女人不成仏論を否定し、さらに女は男に変身することによって往生成仏できるという諸経の「変成男子」説をも打ち破って、法華経を受持するならば、女人は女の身のままで忽ちのうちに仏になれるという即身成仏の法門を明らかにした。ここに提婆品における龍女成仏法門の最大の特徴がある。日蓮は、一切経の中で法華経が第一に尊い経であり、法華経の中では提婆品の説く龍女成仏（女人成仏）の法門が第一の肝心であるとし、何よりもまず女人成仏を唱導したのである。」と述べられています。（「大崎学報」第155号所収　石川教張「日蓮の女人成仏法門について」、「真宗史のなかの女性」西口順子　法蔵館『日本史のなかの女性と仏教』所収参照）

また、勝浦令子先生によれば、平安時代の女性の出家は二段階出家でした。最初の段階では尼削ぎ（肩ぐらいの長さの髪）、次の段階では完全剃髪で、臨終出家に多く見られ、これは「変成男子」を意味するのではないかと推論されています。真宗の女人往生説は、「転女成仏・変成男子」で剃髪した尼僧姿になることが男子に変成したことを意味すると解釈しています（『女の信心』勝浦令子　平凡社参照）。したがって日蓮宗の場合、教義上からも女性は女性のままで成仏するとしているのですから、女性教師は有髪で堂々と活動できる気がします。やはり女性が剃髪すると言うことは、性を解脱している事を象徴し、男性以上の高いハードルにならないでしょうか。

信行道場の種類のところでも述べましたが、剃髪・有髪については賛否両論があるものの、補教信行道場が廃止になれば、信行道場に入り、より積極的に男性教師を補佐し、寺を支えていこうと志す寺庭婦人が教師を目指すことが難しくなり、減少することが予想されます。檀信徒の中にも、「有髪の尼僧さんだと親しみが持て気軽に声をかけられる」という声も多く聞かれます。剃髪・有髪に拘らず、それぞれが活動しやすいスタイルでいることが良いのではない

でしょうか。

「女人成仏」をめぐる混乱は、少なくとも日蓮宗に於いてはすでに鎌倉時代に日蓮聖人によって終止符が打たれていたと思います。その教義によって、宗祖は当時の女性信徒に熱烈に支持されていたのでしょう。「女人成仏」の教義をきちんと認識することで、法華経の平等観・慈悲観を解りやすくアピールできます。

しかし現場の状況をみると、教師自身でさえ「女人成仏」の教義を認識して活用できていないように見えるばかりか、教義を取り違えた言動があります。今一度、「女人成仏」の教義を再確認する必要があるのではないでしょうか。

註

『法華経』（下）坂本幸男・岩本裕　訳注　岩波文庫　解説　坂本幸男参照

提婆品第十二

「この女人成仏と前の悪人成仏とは法華経の特徴として古来多くの人々の信仰を集めた。但し、注釈家達によれば、成仏の本質は、女人に即しての成仏、即ち女人即成と見るのであって、男子に生れ変って成仏するとは見ない。」

勧持品第十三

「更に仏は養母の摩訶波闍波提比丘尼に一切衆生喜見仏の記別を、妃の耶輸陀羅比丘尼に具足千乃光相仏の記別を与え、またその眷属の六千の比丘尼にも記別を与えたので、比丘尼は他方の国土においてもこの経を宣べることを誓うのである――これは恐らく提婆品の女人成仏の実例を示そうとしたものであろう――。」

『日蓮聖人遺文辞典』（教学篇）より　P.1071

へんじょうなんし【変成男子】「変じて男子と成る」と読む。女人が変じて男子となる、という意。法華経提婆品にみえる語。「転女成男」ともいう。提婆品後半の竜女成仏段に、文殊師利菩薩が竜宮において法華経を説き、八歳の竜女を成仏させたことを聞いた智積菩薩と舎利弗が、爾前・小乗の立場から女人成仏に疑問を発した時、竜女が「忽然(こつねん)の間に変じて男子となって、菩薩の行を具して、即ち南方無垢世界に往(ゆ)いて宝蓮華に坐して等正覚を成じ」（『開結』三五五頁）、女人成仏・即身成仏の現証を示したことが説かれている。経文に「変じて男子と成り」とある故に、法華経の女人成仏を男子に転生しての成仏（改転の成仏）とする者があるが、これは誤りで、すでに変成男子以前に、文殊の教化によって女人の身のままで悟りを得て仏となっていたことは経文に明らかである。智積や舎利弗および一会の大衆の疑いを破するため八相成道を示現したのであって、八相成道の仏は男子であることを要するから変成男子しただけである。男子は男子のまま、女人は女人のままに仏となるのが、法華経の一念三千の成仏である。なお、「変成男子」と漢訳されたもとの梵語は「女性の生殖器が消えて男性の生殖器が生じ」の意（岩波文庫『法華経』巻中二二五頁）。智顗は『法華文句』巻八下（『正蔵』三四巻一一七頁ａ）に『菩薩処胎経』の文を略引して、「魔・梵・釈・女、皆身を捨てず身を受けずして、悉く現身に成仏することを得」と現身成仏（即身成仏）であるとし、最澄も『法華秀句』巻下（『伝全』三巻二六六頁）に「妙法経力即身成仏」と、法華経の力用による即身成仏としている。日蓮も智顗・最澄と同じく竜女の成仏を女人の即身成仏とする。『妙一女御返事』（一七九八頁）、『釈迦一代五時継図』（二四五四頁、二四五七頁）等にみえる。